

# 第1 常任委員会 行政視察報告書

■ 視察日程 平成28年10月26日(水)～10月28日(金)

■ 視察都市 石川県輪島市 富山県氷見市

## 1 輪島市行政視察

- ・ 視察日時 平成28年10月27日(木) 9:30～11:30
- ・ 視察内容 (1) 輪島港マリンタウンプロジェクト  
(2) 本町・朝市通り整備事業  
(3) コンベンション等誘致支援助成金
- ・ 視察調査 輪島市役所 4階 第1・2会議室

### (1) 輪島港マリンタウンプロジェクト

#### (経緯)

- ・ 輪島港は能登半島の北端に位置し、沖合・沿岸漁業の基地であり、また、避難港に指定され、海上交通の安全を確保する面でも重要な港に位置づけられ、旅客船が寄港し多くの出会いを創出する岸壁、親水護岸を備え利用者に潤いと憩いをもたらす緑地、訪れた人々が輪島の魅力を体験できる観光施設など、輪島港の機能を充実させることで、さらなる交流人口の拡大や地域の活性化を図る必要性があった。
- ・ 輪島市街地では人口が密集していることから、イベント広場、都市公園、スポーツレクリエーション施設の不足、駐車場不足による交通渋滞等の課題を抱えていた。
- ・ これらの課題を解決するため、海面を埋め立て新たな土地を造成し、港を中心とした魅力あるまちづくりを目指して、平成5年から石川県と輪島市が共同で「輪島港マリンタウンプロジェクト事業」に着手し、輪島をさらに発展させ、海・港を中心とした魅力あるまちづくりを目指すことになり、22年間の事業期間を経て平成27年3月に完成、供用開始となった。

#### (目的・特徴)

- ・ 輪島港の機能充実、交流人口の拡大や輪島塗等の地場産業の振興、地域の活性化を図ることを目的とし、石川県による護岸(ふ頭用地)、旅客船岸壁(2～3万トン級)、緑地護岸(親水護岸)、緑地の5.2ha事業と、輪島市による観光交流施設、ボートパーク、交流拠点施設、スポーツレクリエーション施設、住宅用地の13.5haの事業を実施した。

- ・海面を埋め立て新たな土地造成により、旅客船の寄港できる岸壁、海・港に親しめる緑地、市街地の回遊を促進するための拠点、文化・スポーツなどの交流拠点及び住宅用地の整備を行うことができた。
- ・輪島港マリンタウンプロジェクトにより、滞在型交流都市への転換を目指して、新たな宿泊ニーズに対応するため、ホテル業界へのアプローチとホテル誘致が実現した。

#### (効果)

- ・旅客岸壁の整備により、「にっぽん丸」などのクルーズ船が毎年5～6隻が寄港し、観光振興に大きく寄与している。また、クルーズ船の寄港には、数千人の市民や大漁旗をなびかせた漁船による歓迎、見送りが行われており、そのことが高い評価を受け、「ポートオブザイヤー2010（輪島港が受賞）」、「クルーズオブザイヤー2010 特別賞（輪島市が受賞）」を受賞した。
- ・観光交流施設（イベントスペース・緑地）を中心としたイベントスペースは、「輪島市民まつり」をはじめとする輪島四大祭りなど、市内で行われる大規模なイベントの際に利活用され、訪れた観光客と地元の人・モノが交流し、地元の賑わいと活性化に大きく寄与している。
- ・交流拠点施設にオープンした「輪島キリコ会館」には、大小様々なキリコが展示され、能登の祭り文化を体感することができ、毎年入館者が増えており、輪島の新たなシンボルとして観光誘客に大きく貢献している。
- ・市民と共に「輪島港マリンタウン活性化協議会」を設立し港を整備した。街の中にシングルユースのホテルがないため、「ホテルルートイン」を誘致し平成18年の開業につなげることができた。

#### (課題)

- ・住宅用地の整備後、当初計画より用地利用が遅れている。このことは、昭和58年に発生した日本海中部地震において輪島港は津波の被害を受けており、地元住民は津波などの高波に対する大きな不安を抱えていると思われる。このことは今後の高波対策についての課題である。
- ・住宅用地が海に近く津波の際の避難場所までの距離が遠いなどという理由で売れ行きが芳しくないため、市としても努力している。

#### (感想・私見)

- ・大規模な直轄事業は、一度事業が着手されると途中段階での計画変更等は困難を要するため、事業計画段階から地元ニーズを聞き、実施にあたり創意工夫がされている。
- ・事業完成後、観光客の大半が徒歩で市街地内の周遊・散策を行っており、市内における二次交通導入の必要性から、全国初のエコカート等の車両を使った市街地

の回遊性向上を図る取り組みの調査や社会実験を行い、未来型観光商品として高齢者の方でも安心して訪れ、観光資源に触れてもらうことができる体制づくりを確立することにより、これ自体を観光商品として全国に宣伝を実施し、誘致誘客に繋げ、地域の活性化を図ろうとしている。

- ・輪島市の人口は28,426人と留萌市より数千人多い位だが、海を埋め立てて巨大なマリンタウンを完成させたことに驚くとともに、県と市と地元が一体となりこのプロジェクトを完成させたという熱い想いが伝わった。完成までは埋め立ての延長や見直しなど様々な苦労があり、さらに新しいホテルを市が誘致したことにより起きた既存の旅館業者との意見の対立などもすべてクリアして現在に至っている事は、輪島市の思考や判断が優れていたと感じる。
- ・街の電線は地中化され、街全体に統一感があり、また、ゴミなども落ちておらず、観光都市としての意気込みを感じた。
- ・白米の千枚田は一人の職員の発想からこれだけの観光資源になり、また、それらは地域のボランティアに支えられており、街全体のやる気を感じた。
- ・輪島港マリンタウンプロジェクトは、確かにキレイに整備されているが、津波対策は不十分に思えた。
- ・国会議員の政治力の強さを感じた。
- ・スポーツ施設や住宅施設をつくるだけでなく、街の歴史のある祭り「輪島キリコ」の会館を作ったり、緑地の芝の苗付けを市民が行ったり、市民と共に港をつくる方針のもとでマリンタウンプロジェクトが進められてきたことがわかった。大型客船やホテルルートインを誘致するなど、街を上げて積極的に誘致活動を行っている。市民と市が一体となってまちづくりを行って成功した例といえる。

## (2) 本町・朝市通り整備事業

### (経緯)

- ・朝市と商店街が共存している全国でも珍しい特殊な道路（全長360m）の活用形態となっており、この独特の歴史や文化性を活かしながら電線類の地中化や路面の整備（路面をさくらと黒の御影石で色分けし、午前は露店・午後は歩道として利用）を行っている。
- ・整備事業を行うにあたり、地元住民を中心としたワーキング会議を発足し、行政や各分野の専門家を交え、意見交換を行いながら、魅力・賑わい・文化が香り「本物に出会えるまち」をつくる取り組みを進めてきた。



### (目的・特徴)

- ・ 地区周辺では平成 10 年前後から、まちづくり総合支援事業など各種事業により総合的なまちづくりが行われており、輪島地区では輪島港を中心とした地域において用地を造成する「輪島港マリタウンプロジェクト」が実施されてきた。
- ・ 輪島朝市の玄関口における観光交流施設等の基幹事業や朝市通りにおける拠点施設等の提案事業を行うことにより、滞在交流型のまちづくりを目指していることから、朝市通り整備事業は輪島朝市の入込客数の増加に繋がっている。

### (効果)

- ・ 輪島朝市に休憩所と一体となった情報案内機能を設置し、他地域のまち歩き情報提供拠点と連携した観光情報を提供することにより、回遊性を向上させた。
- ・ 日本三大朝市である輪島朝市の地域文化を持続的に継承するため、専門家によるセミナーやモニターツアーを実施し、その成果を踏まえ行政と朝市組合、地元商店街、地元高等学校のワークショップにより、将来ビジョンを取りまとめた。  
(輪島未来創造 若者×高齢者<TSUNAGARU>地域文化「輪島朝市」継続事業)
- ・ 電線の地中化により、街全体に統一感が生まれた。輪島の主婦はもちろんのこと輪島を訪れる観光客も多く、観光名所になった。

### (課題)

- ・ 近年、宿泊客数や輪島朝市の入込客数の増加傾向があるものの、基幹産業である輪島塗の衰退、新市街地と既存市街地の連携など、各種の課題を有しており、マリタウンを中心とした整備を行い、滞在型交流都市を目指している。
- ・ 客がいなかったら閉店したりする店があったり、強引な声掛けをしている人も中にはいるため、声掛けの練習をするなど研修を行っている。

### (感想・私見)

- ・ 輪島市全体で合意形成に基づく将来ビジョンの策定がされている。また、専門家による輪島朝市の強みや売りの評価など、観光客との会話を積極的に取り入れている。
- ・ 輪島朝市を中心とし、回遊性を高めるための魅力ある歩行動線の整備やコミュニティバスなどの導入を積極的に行っている。
- ・ 近年、他人のことは無関心、無関係だとの個人主義が蔓延する現代社会、自分の権利については声高に主張し、他人のためには小さな譲歩も拒否する風潮が目立つ地域社会のなかで、輪島の人々は他人のために自分の土地の一部を無償で提供するなど、まちづくりの主役は、そこに住む人たちなのだと強く感じた。

- ・新鮮な野菜、採れたての魚だけではなく輪島塗や地元の酒など地元産品を多く出品している。出品者も買い物に来る人も女性が多いのが印象に残っている。道路に鮎の殻を使ったり、新しい石畳にしたりするなど街並みにも気が配られている。

### (3) コンベンション等誘致支援助成金

#### (経緯)

- ・輪島市は、年間の宿泊客数及び輪島塗生産額が昭和40年頃から平成3年頃までは右肩上がりであった。ピーク時に宿泊客数が約53万人、輪島塗生産額は180億円となり、そこから年々減少が始まり平成27年度では、宿泊客数が約21万人で輪島塗生産額に至っては1/4以下となっている。
- ・輪島市は、全国的にも知名度のある観光都市であるが、平成13年以降、観光客数は減少の傾向にあることから、交流人口を増加させ、賑わいを創出する新しい取り組みとして、スポーツ大会、大学の合宿、スポーツ少年団の合宿などの誘致を進めることとなった。
- ・輪島市内での合宿等の実施に、インセンティブを与えるため、宿泊を伴う学会、合宿を行った場合、助成金を交付するなど支援を行ってきている。



#### (目的・特徴)

- ・コンベンション等誘致支援助成金の対象は、学校、小・中・高等学校内のクラブ、少年野球クラブ、ミニバスケットボールクラブ、大学・企業のサークル、学術研究団体などの団体（任意のモノを含む）など対象を幅広くしている。
- ・助成金の額は、スポーツ等の大会、学会、修学旅行等の宿泊を伴って参加した場合、宿泊者1名1泊500～3,000円の助成となっている。例えば10人で10泊すると10万円が助成される。（1団体あたりの年間限度額は100万円）
- ・羽田空港一のと里山空港間を往復利用した者については、一人につき1,000円が加算される。

#### (効果)

- ・交流人口を増加させるための仕掛けとしてコンベンション等誘致支援助成金は効果があると考えられる。支援助成金の実績は、波はあるものの毎年2,000人から4,000人の助成実績がある。

- ・交流人口の増加に伴い、以前にも増して回遊性と賑わいのあるまちづくりに力を入れている。道路の舗装を美しくするなど修景を図り、輪島らしい街並みを保全育成し、核となる交流施設の整備を行ってきた。
- ・これに合わせて「輪風・まちづくり協定」が制定され、地域住民の参画によるまちづくりの計画全体が決められ、住民参画の意識が高い。
- ・近隣地域からのスポーツ合宿などの申請が増え富山県、福井県、石川県で約6割を占めるなど増加傾向にある。

#### (課題)

- ・石川県内には同様な合宿誘致制度を設けている自治体が数多くあり、各自治体による合宿誘致の地域間競争が激化している状況で、どのように差別化し合宿誘致を進めるかが課題である。
- ・交流人口の増加による宿泊施設の不足が、今後、滞在型交流都市を目指している輪島市の大きな課題のひとつである。
- ・利用実績は北陸3県に限られているため、全国的な情報発信が必要。

#### (感想・私見)

- ・輪島市は都市の整備と合わせて回遊性を高めるまちづくりを行っており、この取り組みは、都市活性化の本来の姿と感じた。
- ・合宿誘致の課題でも触れたように、合宿誘致制度を設けている自治体が多くある現状からすると、差別化は勿論であるが、さらに詳細な分析が必要と思われる。
- ・今後、留萌市の合宿誘致においては、合宿に必要な交通条件、宿泊設備条件、練習・研修施設およびその他の条件について、道内外の高等学校、短大・大学を対象とした合宿動向調査の必要性を感じた。
- ・視察を踏まえ、どのような政策やPR方法によって、合宿誘客を効果的に促進させる事ができるか検討する必要があると感じた。
- ・大学や企業のサークルなどの団体にまで助成金がでるのは珍しい。輪島の観光客が減少しているのは以外だったが、まち全体でおもてなしをしようという対策が取られている。合宿を誘致するには運動施設や文化施設の整備に加えて宿泊施設の整備をすすめなくては全国各地から人は来てくれない。

**【ほか、各委員からの視察報告書、記録写真、両市からの視察資料等は事務局に保管】**

## 2 氷見市行政視察

- ・視察日時 平成 28 年 10 月 27 日（木）14：30～16：30
- ・視察内容 （1）廃校の高校体育館を市役所庁舎にリノベーション
- ・視察調査 氷見市役所 2階 特別会議室

### （1）廃校の高校体育館を市役所庁舎にリノベーション

#### （経緯）

- ・氷見市旧庁舎本館は昭和 43 年、別館は昭和 34 年竣工の建物で老朽化が進んでいたため、平成 23 年度に実施した耐震診断の結果、本館・別館とも震度 6 強クラスの地震に対して、耐震基準を満たしていないことが判明した。また、同時期に富山県が発表した津波シミュレーション調査結果においては、津波の浸水想定区域内に位置していたため、移転整備することとなった。



#### （目的・特徴）

- ・庁舎整備案について様々な検討を重ねた結果、7 案の中から旧富山県立有磯高等学校の体育館・校舎の一部改修案が選択された。これは市職員の発想から誕生した体育館を活用した新庁舎となったことで、既存の公共施設の有効活用という視点からも、廃校となった土地・建物が市民が集まる施設として再生することは大きなメリットがある。
- ・選定となった理由は、建替えと比較すると費用が半減、加えて国の緊急防災・減災事業債の適用が見込めたことで、総事業費約 19 億 4000 万円、そのうち氷見市の負担は約 8 億円に抑えることができた。
- ・旧庁舎は、市民の利用頻度が高い課が 2 階と 3 階に分散配置されており、建物も本館、教育文化センター、いきいき元気館に分かれていたことから、その再編・集約が望まれていたことで、民間の斬新なデザイン、アイデアを採用し、高い快適性を効率的な維持管理性能を両立できた。
- ・体育館を A 棟、B 棟、旧校舎の一部を C 棟として改修し、その他の校舎は解体し不足していた駐車場用地とした。庁舎の 1 階フロアには、市民課、税務課、福祉の関連課が配置され、2 階フロアには市長室や総務課などが入った。分散していた市役所機能が集約され、市民の利便性が向上した。
- ・「使い手の専門家である市民意見を取り入れたい」と市長が自らコーディネーターとなり、市民と市職員が参加する「新市庁舎デザインワークショップ」を実施してきた。

- ・ワークショップは3回にわたって行われ、その中で「市長室の場所が一番良い場所にあるので、そこを協働スペースに」という市民の提案により、市長室は出入り口の近くに移動し一部ガラス張りの部屋となるなど、体育館を活かしていることで配置変更は比較的容易で、ワークショップの成果がうまく反映できた。

#### (効果)

- ・ワンストップサービスにより、市民が利用しやすい行政サービスが実現し、対話型の機能配置によって、市民の方への積極的な声かけが自発的に生まれるなど、市職員の意識も変化した。また、フラットな空間が各課の連携を強化し、複数の課にわたる問題も即座に集まって対応が可能となった。
- ・氷見市社会福祉協議会（市社協）の職員が駐在する「ふくし相談サポートセンター」を県内で初めて新設した。また、社会福祉士や看護師等の資格を有する市社協の4人が常駐し、行政とともに福祉の課題に対応し、ハローワークや医療、教育などの部外の専門機関とも連携強化が図られている。
- ・新庁舎の見学を市内観光へと繋げ、交流人口の拡大や市内経済活性化の起爆剤となることを期待している。また、新庁舎開庁以来、見学・視察者数は、2,300人に上り（H26.12 未現在）今後は行政視察などがさらに増えることが見込まれる。
- ・旧グラウンドを駐車場に整備できたため、市民のための駐車場を広く確保する事ができた。
- ・新しい庁舎が整備されたことにより、防災拠点機能が確保され県の遊休施設の活用問題が解消された。
- ・市民や民間のデザイン・アイデアを採用し、高い快適性と分散していた役所機能を集約し市民の利便性が向上した。

#### (課題)

- ・行政として日本初の「フューチャーセッション」ルームを備え、「多様な主体の人たちが対話を通じて問題解決する場」としてのその活動に向け準備中である。
- ・旧校舎の一部を改修して使用しているが、今後、耐用年数から建替え等の整備が出てくるものと思われる。また、旧庁舎跡地の利活用と庁舎移転に伴う中心市街地の賑わい対策が求められる。
- ・災害時の避難場所の確保や防災資機材等備蓄庫の併設、防災空地の確保など防災拠点としての機能強化が求められる。
- ・庁舎は新しいが移転の際の物品は旧庁舎からのものであり、今後、更新が必要になってくる。
- ・多くの市民の利用が多い窓口を1階に集約したため、移動距離が長くなったという声もある。

#### (感想・私見)

- ・庁舎移転に伴って、市民からの苦言などが当初から無い中、新築移転について概ね市民理解がされていたこと、また、市民病院の指定管理と移転など、他機関との連携や災害時における幹線道路網へのアクセスが必要とされていた時期に、廃校の高校体育館を利活用できたことは非常に大きかった。
- ・庁舎1階部分は市民向けの窓口業務で、ワンストップサービスを目指した設計となっている。天井の色分けされたパイプにより、オレンジは子育て関係、黄色は介護関係といった具合に、市民から見たわかりやすさを重視したデザインとなっていることで動線に無駄がない。
- ・2階の天井がダイナミックなデザインであり、これは過剰な装飾ではなく、天井の高い体育館で光熱費節約のために編み出した工夫である。さらに、大きなスペースをとる空調設備も、ホワイトボードで囲って、敢えて通路の真ん中に設置して来庁する市民への情報発信やちょっとした掲示物ができるスペースとなっている、エコと実用性が両立している。
- ・庁舎が老朽化した留萌市にとっては、耐震補強と新築以外の第三の選択肢を考える視察となった。また、今後の庁舎をはじめとする公共施設の個別計画に参考となった。
- ・市民の意見を多く取り入れて、わかりやすく誰もが利用しやすい市役所をつくりあげたのはすばらしいと思う。中心部に近い位置にあった市役所を1.3km離れた場所に移転するにあたっては多くの議論がなされたと思うが、財源不足と公共施設の再利用という面において全国の自治体にとって大きな可能性の一石を投じたといえる。
- ・ワンフローであるため見通しが良すぎて、職員は落ち着かないように見えた。
- ・最終的には首長の発想、決断、タイミングの判断が良かったと思った。
- ・市役所の移転に伴い遠くなる人もいるが、逆に近くなる人もおり、一概に移転場所の判断を遠近では出来ないと思った。こういう施設は市職員も視察するべきと思った。
- ・平成30年には留萌高校と千望高校が統合され、留萌高校校舎の使い道が議論されることになるが、この氷見市役所の斬新なアイデアとコストパフォーマンスには感銘を受けた。どのような問題にも賛成と反対が起きるが、それを理解してもらおう努力を重ね、まちの未来のために活かしたいと感じた。



**【ほか、各委員からの視察報告書、記録写真、両市からの視察資料等は事務局に保管】**